（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	西島　薫
論文題目	西部カリマンタンにおけるウルアイ王権とその歴史的変容		

（論文内容の要旨）

本論文は、ウルアイと呼ばれるダヤック人の在来王権と、それが20世紀初頭以降のインドネシア・西部カリマンタンにおける地方政治とどのように関わり、どのように変容してきたかに関する研究であり、著者は、2014年9月から2016年月3月までの19箇月間と2017年8月におこなったフィールド調査及び文献調査から得られたデータに基づいて論述を展開している。

序章では、現代インドネシアの地方政治に関する先行研究を検討し、本論文の問題設定をおこなっている。インドネシアの地方政治研究は、地方の政治エリートの活動、パトロン・クライアント関係、慣習法（アダット）の復興に焦点を合わせてきたが、これらの研究はいずれも、ウルアイ王権のような在来政体が変化する地方政治の状況に適応しながら存続し、影響力を保ちつづけてきたことに十分な注意を払ってこなかった。こうした研究の現状を踏まえ、著者は、ウルアイ王権を西部カリマンタンにおける政治状況の変遷と関連づけて研究をおこなうことの学術的な意義について論じている。

第1章ではウルアイ王を介して村落部に居住するダヤック人にアクセスし、その政治的利用を図ろうとする、西部カリマンタンの都市部に居住するダヤック人エリートの歴史的な形成過程を明らかにしている。その淵源は20世紀初頭からのカトリックの布教と教育である。カトリック系の学校で教育を受けたダヤック人首長の子どもたちは、都市部に移住し、社会的上昇を遂げることで、村落社会から切り離され、かつ乖離したダヤック人のエリート層を形成していった。

第2章では、オーストロネシア諸族の在来王権との比較を念頭におきながら、ウルアイ王が実施する神器祭祀やウルアイ王と村落社会との関係を記述することで、次の諸点を明らかにしている。ウルアイ王権は、人々に豊穣と安寧をもたらす生命の源としての神器の祭祀、神器祭祀者としての王、僅かな数の側近から成っているだけであり、統治的に機能する社会組織や軍隊のような暴力装置をもたない。また村落の土地に対する権利と表裏一体の関係にある親族組織とも無縁である。そのため、ウルアイ王権は領地をもたないだけでなく、政治的にも無力に近い。だが、その結果として変化する政治状況に適応できる大きな潜在的可能性をもっている。

第3章では、口頭伝承と文書資料を丹念に織り合わせることで、太平洋戦争終了後の荒廃した状況から、独立期、スカルノ政権期、スハルト政権期、その後の民主化と地方分権化の時代において、ウルアイ王が西部カリマンタンの変化する政治状況やダ

ヤック人エリートの政治活動に応答するなかで巧みに立ち回り、病気を治癒し、豊穣をもたらす呪術者、周縁化されたダヤック人の象徴、慣習法（アダット）の守護者、さらにはダヤック人の王として、村落部に居住するダヤック人たちの前に姿を現してきた変遷の過程を歴史的視点から詳細に描き出している。

最終章では1〜3章における記述と分析を要約するとともに、序章で検討した先行研究に立ち返り、本論文の学術的意義についてのべている。すなわち、ウルアイ王権の変化する政治状況に対する柔軟性と適応力は、それが村落の土地に対する権利と表裏一体の関係にある親族組織とは別の相で成立していることに由来するが、こうした政体と親族を区別する視点が先行研究には欠けていたことや、こうした区別をおこなうことから開ける研究の展望が論じられている。